堀内先生と私

試験の採点をすると思い出すこと

田中　久陽　　（平２年学部卒）

Ｄ１，Ｄ２の頃，私は所属していたインド並みの人口密度を誇る大石研からエスケープして堀内研の学生部屋で論文読みや先輩との雑談に耽ったりすることが多かったです．６１号館５階の堀内研は，理論の研究に没頭するには実に理想的な所でした．貴重な文献の山，勉強熱心な先輩＋後輩＋同期の諸君，適度な静かさ，机とイス，うまいコーヒー等々... 現在でもなかなかこんな研究室にはお目にかかりません．　京大の数理解析研究所に匹敵するのではないでしょうか．（大げさですか？）

そんなある晩珍しく遅い時間まで堀内先生が居室に残っていらっしゃいました．そして，丁度仕事を終えられたご様子で金子先輩にコーヒー（もちろんアメリカン）を所望され，先生曰く「試験の採点が終わったけれど，（答案の）出来が良くなくて困ったものだ」．

その試験はおそらく「確率過程」だったと思いますが，私は堀内先生のその言葉に少なからず驚きました．といいますのも，「確率過程」は受講者数がかなり多く，しかも試験は記述式で考え方やロジックを問うもので，その採点は相当に面倒な筈だったからです．当時，（私の記憶は大分あいまいですが..）堀内先生は電子情報通信学会等の重責を負われていらっしゃったはずで，そのように多忙な方が学部の試験採点を自ら丁寧にされていたことは当時の私に大きなショックでした．このように細かな事もいい加減にしないことが，大きな仕事に結び付くということでしょうか．遅ればせながら，このとき私は堀内先生のお人柄を垣間見たように思いました．

あれから，十数年たち，私は四十代を迎え，いくばくかの責任も負わされる立場になりました．堀内先生の「確率過程」ではありませんが，私もこれに近い内容の講義を行い，試験の採点をしております．そして，夜遅くその作業が終りますと，研究室の学生たちに「試験の採点が終わったけれど，出来が良くなくて困ったものだ」とグチをこぼして，（アメリカン）コーヒーを飲みます．その時，私の頭の中には ６１号館の５階で堀内先生のおっしゃられていた様子が思い出されるのですが... それを学生たちは知る由もありません．（了）

目次へ戻る>>